山が水と空気をつくる
天衣無縫に生きた五四年

登米町森林組合参事

高橋　満雄

【たかはし　みつお】

1925（大正14）年	12月19日、登米町（現登米市）に生まれる
1955（昭和30）年（就任年不明）	登米町森林組合に奉職 登米町森林組合参事
1979（昭和54）年	４月１日死去

山守の系譜に連なる伝説の大人（たいじん）

やることなすこと型破りで、遅刻、無断欠勤、意に介さず。髪はボサボサ、靴は磨かず、挨拶は「オウッ」の一言のみ。月に何冊も本を読み、ある日突然「中国に行ってくっから」と言い残して訪中の旅に出る。拡大造林を批判したかと思えば、単位森林組合がごく初期の形態だった時代に地域連携を持ちかける。林業の機械化を目論み、いち早くベンツ製木材運搬車ウニモグを購入する。

そんな男が登米町森林組合にいた。

高橋満雄。一九二五（大正一四）年一二月一九日、登米町（現登米市）大字日根牛小池、高橋幸之助の三男として生まれ、登米町森林組合に数々の逸話を残す伝説の大人だ。

日根牛は、白石宗直を始祖とする登米伊達家領の一村。寺池城のある寺池村と北上川を挟んで並び、登米伊達領二万石の一角を担う豊かな土地だった。丘陵の頂きには小池館や舞鶴館と呼ばれる中世の館跡があり、入谷峠を越えれば志津川の海が見えた。あるとき登米伊達家の殿さまが一帯の里山を集落に分け与えた。高橋家はそれを機に日根牛の〝山守〟を務めたと伝えられる。

森の番人の系譜を自覚していたかどうか、一度故郷を離れた高橋は病に倒れて日根牛に戻り、以降はずっと登米町森林組合と社会のために尽くすのである。

故郷の大面洞が天然のサナトリウムになった

高橋は、みんなから「満っちゃん」の愛称で親しまれた。登米町森林組合に奉職する一方で登米町議会議員を四期務めたが、評伝や追悼録などのまとまった記録はない。そこで高橋の人となりを知る、登米町森林組合前参事の竹内信男、同組合元職員の千葉よし子、元登米町議会議員の小白幸記、三人の追想を手掛かりに足跡をたどることにした。

昭和恐慌や二・二六事件など暗い時代に幼少年期を送った高橋は、登米高等尋常小学校を卒業後、満蒙開拓団に入った長兄を追って満州に渡る。

当時政府は、「満州へ行けば一人二〇町歩の土地が貰える」をうたい文句に大規模な満州への移民政策を推し進めており、多くの農業者が市町村ごとに団を編成して大陸へ入植した。

数え年一六歳から一九歳の青少年たちには満蒙開拓青少年義勇軍への入団が準備されていた。高橋もおそらく青少年義勇軍での渡満だったと思われる。青少年義勇軍の若者たちは内地で二ヶ月、現地で三年間農業実習や軍事教練などを受けた後、開拓移民として入植地へ散らばった。高橋は南満州鉄道の支社に入った後、終戦を迎え帰国する。

故郷に戻った高橋は、広瀬村（現仙台市青葉区）にあった宮城農学寮に学ぶ。宮城

農学寮は、宮城県農業大学校の前身となる農業実習の教育機関で、昭和五二年に名取市へ移転するまで広瀬村の落合にあった。全寮制というから高橋も広瀬川の渓流近くに建つ学び舎で寝起きしたのだろう。

その後高橋は京都のタキイ種苗に入社して会社員生活を送るが、結核と脊椎カリエスを発病し、帰郷する。

ふるさとに戻った高橋は、日根牛上羽沢の大面洞（現大面倒）で療養の日々を過ごす。澄んだ空気と清い水に恵まれた大面洞は天然のサナトリウムとなった。湿気を避けて木小屋の二階に寝起きし、山菜を自分で取りに行って食べる暮らしを約二年間続けるうち、高橋の病は癒えていった。

このときの体験が、後に高橋の山林を源とする生態系への視点や自然林を尊重する考え方、さらに菌類や草木への深い知識を育む土壌となる。

林地の利用は昔の形を維持していけ

昭和三〇年、療養を終えた高橋は登米町森林組合職員として社会復帰を果たす。

高橋の規格外の行動や非凡な発想はすでにこのころから際立っており、「考えが、何年も先を進んでいる人だった」と小白は言う。

「昭和三四、五年頃だったでしょうか、田尻の大貫や伊豆沼の新田にあった森林組

合へ事業提携を持ちかけたことがありました。土地のつながりもない地域の森林組合同士が提携するのは無理なんじゃないかと私は言ったのですが、満っちゃんは、否そんなことはないと言う。それで私が車に乗せてそれぞれの組合に赴きました。しかし向こうにしてみれば、満っちゃんの構想はピンとこない。それで話は流れてしまいました」

造林事業にも一家言持っていた。

「林地の利用は昔の形を維持していけ。もとの形を壊すな」

しかし終戦後、政府は木材需要の拡大に対応して国有林や民有林の緊急増伐を行ない、その跡地に成長の早い針葉樹を植栽していった。このうち広葉樹林を伐採してその跡地へ針葉樹を植えることを「拡大造林」と呼び、十数年のあいだに里山の風景が一変するほどの造林ブームをまきおこした。

「牧野にまで植林するなんて！」と高橋は批判の眼を向けた。

小白は、高橋が定期購読していた『日本草地学会』の学会誌に、日本の林野のなかで登米日根牛の牧野率が一番高いという記事が載っていたことを覚えている。

高橋が病を癒した大面洞は、学会誌に評価されるほど豊かな林野のなかの牧草地だった。自然に人間を再生させる力があることを、高橋は故郷の山で身を持って知っていた。そんな場所が経済的に価値が高いとの理由で針葉樹林に変えられていく―。林業人として忸怩たる思いだったのではないか。

機械好きが生んだ登米のリョウシン号

「この車、山だの川だの歩くのに良いんだ」

機械好きの高橋が、ベンツの中古の作業用自動車ウニモグを導入したのは昭和四四年のことだ。ちょうど里山再開発パイロット事業が始まった年で、県内には中古のウニモグが一台あるだけだった。

「県下の森林組合でウニモグを導入したのは登米町が最初です」。当時、組合の作業班に所属していた竹内は、価格四六〇万円と帳簿に付けている。竹内たちはさっそくウニモグを駆使するが、かなり使い込まれた中古車だったためすぐに壊れてしまう。次に購入したのが小型特殊自動車のデルピス号だった。

「ところが使い方が悪いせいもあって、すぐ傷むんですね。そこで満っちゃんが及川自動車に修理を頼みに行く。何度か社長と話をしているうちに、新しい林内運搬車を開発しようということになったようです」

及川自動車は登米町にあった自動車メーカーで、社長の及川は先進の車社会をヨーロッパに学びにいくほど熱心なエンジニアだった。高橋と意気投合した及川社長は「俺が造ってやるから」と、新しい運搬車の試作を始める。高橋は及川自動車に毎日足を運び、試作工程を確かめては注意点や修正箇所を指摘した。

テストパイロットを務めたのは竹内だ。

「実際に木材を積んで走行したり、シャフトが折れたり、何回も試作しました」

林業の本格的な機械化は昭和三〇年代、伐採作業へのチェーンソーやトラクタの導入に始まり、四〇年代の集材機による集材、トラックによる運材、五〇年代の林内作業車やモノレール導入を経て、現代の高性能林業機械の時代に至る。

全国森林組合大会の決議事項にも、第四回（昭和三五年）「作業の機械化」、第一二回（昭和四三年）「林業労働力の確保と機械化の推進」とあり、当時の林業者にとっては大きな課題であったことが分かる。

高橋は、その「機械化」を地元のメーカーの協力を得て図ろうとした。機械化は、作業員の安全を確保し、重労働から解放することでもあった。機械に対する高橋の愛着の背景にはそんな森林で働く者を思う気持ちもあったのではないか。

運搬車が完成したのは、高橋の死後、昭和五七年頃だった。

竹内が当時をふり返る。「従来と比べると画期的な車でした。六輪駆動でぐいぐい坂道を上がっていく。その迫力に、私たちは最初〝山鬼〟と呼んでいたほどです」

最終的に名前は「陵岑号（リョウシン号）」と決まる。

「満っちゃんはよく、山の稜線に沿って作業道路をつくれと言っていました。むかし、村の人たちが薪を背負って歩いた道があるからそこを基準につくれと」

岑は中国語で小高い山の意味を持つ。及川自動車が高橋の思いを汲んで名付けたのだろう、そう竹内は推測する。

陵岑号は、全国森林組合連合会の推奨を受けて普及が進み、「登米のリョウシン号」として広く利用されるようになった。

次に続く者たちに託した思い

昭和五三年、高橋は「森林総合整備事業」に関する情報をいち早く入手し、指定を受けるための準備を進める。

事業は昭和五四年度から一〇年を目途に全国で実施され、助成対象も天然林改良や下刈、雪起こし、除間伐などの保育、さらに付帯する作業路の開発が対象となるなど、より充実した内容にあらたまっていた。

指定を受けるには、森林所有者の同意や行政の積極的な関与が条件となっていた。高橋は町長や助役に事業の重要性を説明したり、県の関係者に話を聞いたりするなど精力的に動き回った。

しかしそんな高橋をふたたび病魔が襲う。肝硬変だった。

登米の病院に入ったが病状は一向に回復しない。高橋は病室に大量に本を持ち込み、体調のゆるす限り読書にふけった。自分の病気について本で調べ、医者を相手に知識を披露することもあったという。

翌年の三月下旬、高橋の枕元に登米町が森林総合整備事業に指定されたとの知らせ

が届いた。直接指揮した最後の仕事が上首尾に終わったことを聞き、高橋は安心したようにうなずいた。

四月一日、転院先の仙台の病院で死去。五四歳の短い生涯だった。

竹内は、亡くなる直前、高橋から「これを読め」と真新しい本を手渡された。『ある山村の革命　龍山村森林組合の記録』と題されたその本には、作業班を組織し、多角経営で雇用を生み出した龍山村森林組合（静岡県）の取り組みが描かれていた。

「いま日本の森林組合に龍山村森林組合に並ぶ組合はない。これを読んで、ぜひ龍山村に行ってこい」

高橋はそう言って後輩に先進事例を学ぶことの大切さを説いた。森で働きながら給与のほとんどを書籍の購入に費やし、ジャンルを問わず知識欲を活字に向けたわが身を肯うかのようだった。

千葉は、高橋が「水と空気をつくっているのは山なんだ」とよく口にしていたのを覚えている。

「いま、森林の効用とか言ってるけれど、満っちゃんはずっと前から分かっていたんだよね」

県森連の方針にも異を唱える反骨精神や国交回復前の中国を訪問する剛胆さなどからはうかがい知れない、繊細な魂がそこには宿っていた。

高橋が若いころ療養生活を送った日根牛上羽沢の大面洞は、いま宿泊やキャンプ、

森林セラピーのできる登米町森林公園として整備されている。

ここで森林セラピーを提唱、指導する竹内は「満っちゃんは、キノコ、山菜、薬草、免疫機能など、森林がもつ可能性について素晴らしい知識と教養を身に付けていた。その教えを私らが受け継いでやっているだけ」と話す。

樹間にひかりが届いて草や菌類を育むように、高橋の思いは〝満っちゃん〟と慕う者たちを通していまも登米の森を見守っている。

※扉写真提供／登米町森林組合